

「盗み」の系譜

——『豊饒の海』における『マヌの法典』をめぐる

徳永直彰*

序論一 二つの落とし物——黒髪と野菜

三島由紀夫の『豊饒の海』四部作（『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』）全体にわたり輪廻転生を見守る本多繁邦は、第四巻『天人五衰』において、転生者の印である左脇腹の三つの黒子を持つ安永透を養子にする。ところが透はその後失明し、狂女との間に子をなし、転生者の宿命であるはずの二十歳の死も迎えない。転生に関わる秘密を本多と共有する友人・久松慶子は、透を転生者の「贖物」と決めつけるのだが（『天人五衰』二十七章）、同二十四章すべてが充てられている「本多透の手記」には、そうとも言いがたい奇妙な描写がある。雪の日に見知らぬ老人が本多家の前をさまよい、ある落とし物をする場面である。

そのまま老人は同じ速度で遠ざかった。老人自身は気がつかなくつたのではないかと思ふが、家の門をすぎて五米メートルほど行つてから、大きな墨滴を落したやうに、外套の裾すそから何かが雪の上に落ちた。

* とくなが・ただあき、埼玉大学教養学部非常勤講師、日本文学

黒い、鴉からすらしい鳥の死骸が落ちてゐた。九官鳥くわんぎょうだったかもしれない。僕の耳にさへ、瞬間、ばさつと、落ちた翼が雪を拂はらつやうな音がきこえる錯覚さへあつたのに、老人はそのまま立ち去つた。

そこで永いこと、まつ黒な鳥の屍しかばねが僕の難問になつた。その位置はかなり遠く、前庭の庭木の梢こすねに遮られ、しかもふりしきる雪がもの影を歪ゆがめてゐるので、いくら瞳を凝らしても、目が確かめる力には限りがあつた。双眼鏡でも持つて来ようか、それとも外へ出て行つて確かめようか、といふ考へにとらはれながら、何か圧倒的な億劫おくせうさに制せられてゐて、それができなかつた。

何の鳥だつたらう。あまり永く見詰めてゐるうちに、その黒い羽根の固まりは、鳥ではなくて、女の鬢かづのやうに思はれた。した。

（『天人五衰』二十四）

村松剛は、この場面と、第一巻『春の雪』における松枝清頭の恋人・綾倉聡子の剃髪はげの場面との相同性を指摘する（一）——《あれほど艶やかだつた黒髪も、身から離れた刹那に、醜い髪みにくいかみの骸むくろになつた》（『春の雪』四十六）。村松は、これを透が「前世を見ている」「過去世との出会い」の描写だとしつつも、透が「本物」か「贖物」かという問いに対する最終的な解答は保留している。だが、この指摘だけでも注目しよ

う。

ところで上記引用の場面の前部分に、さらに不可解な描写がある。透の前に現れた老人は、ここでも落とし物をしているのである。

そのとき右手から一人の老人が傘もささずに、黒いベレエ帽と灰色の外套の姿で現れた。外套の腰のあたりがひどく膨れてゐて、両手でその膨れを抱へるやうにして歩いてゐるのは、雪を厭うて、荷物を外套の下に入れてゐるらしい。老人が痩せてゐることは、その外套のふくらみに似合はぬ、ベレエの下のしほみ切つた顔の形でわかる。

(中略)

老人の腰のふくらみが急に削ぎ落された。大きな卵を生んだかのやうに、雪の上へ包みを落した。僕は落したものに視線を凝らした。はじめは何ともわからなかつた。地球儀のやうな雑多な色と形ものが、雪にはまつて鋭い光沢を放つてゐた。よく見ると、ビニールの包みで、野菜や果物の切り屑がいつぱい詰つてゐるのである。林檎の皮の赤、人蔘の朱、キャベツの淡緑、それらが大きな包み一ぱいに充満してゐる。始末に困つて、捨てに出たのだとすれば、老人は一人ぐらして、氣むづかしい菜食主義者なのかもしれない。野菜屑の夥しさが、ビニールに包まれて、雪にふしぎな新鮮な色合を添へ、菜の緑の破片までそこに或る胸のむかつくやうな蘇りをもたらした。

(『天人五衰』二十四 上記引用の前部分)

前掲村松が指摘した、『春の雪』の聡子の髪を思わせる黒い落とし物——順序からすると老人の第二の落とし物——ならば、『豊饒の海』全

体をつらぬく因縁のやうなものもすぐさま想像できるが、老人の第一の落とし物——野菜屑——の意味は何なのか。

この考察をおこなう前に、もう一つ見ておくべき場面がある。『天人五衰』における晩年の本多が、壮年期以降の悪習である覗きをおこなう場面で、上記「黒いベレエ帽」の老人が再登場するのである。

いちめんの虫の音のなかに、しどけなく横たはつた女は、上半身を中途半端にもたげて、両手で男の首にかじりついてゐた。黒い、ベレエ帽をかぶつた男は女のスカートの裾へ深く手を入れてゐる。

(中略)

……本多は目の痛くなるほど注視してゐるうちに、それまでの空しさの底から、急に曙光が射すやうに色情が湧いて来るのを感じた。そのとき、男がズボンの尻ポケットへ手をやるのが見えたが、おそらく金を盗まれてゐないかどうか、情事の最中に気になる心事が多にはおぞましく、さう思ふだけで、折角湧き昇つた色情が氷結したやうに感じられた次の刹那、わが目を疑ふやうな事が起こつた。

男がズボンの尻ポケットから出したものは飛出しナイフである。親指がそれにかかるや否や、蛇の舌を擦り出すやうな音を立てて、闇の中に刃が光つた。どこを傷つけたかわからないが、女のすさまじい悲鳴が起つた。男はすばやく身を起して、首をめぐらして、あたりを見た。黒いベレエがうしろへずれてゐたので、前髪と顔がはじめて本多の目に触れた。髪は全くの白髪で、痩せた顔は皺を隅々まで、刻んだ六十代の老人の顔である。

本多が呆然としてゐるすぐ傍らを、その年とも思へぬ疾風のやうな速さで、男は逃げ去つた。

(『天人五衰』二十六 傍点徳永)

騒ぎに巻き込まれた本多は一時警察に拘束され、居合わせた週刊誌の記者に「八十歳の覗き屋」と記事で書かれることになる。「覗き」の悪習は、輪廻転生を見守る本多の認識者としての属性が壮年期以降いびつに歪んだ結果にほかならないが、その本多に「覗き屋」のレッテルが貼られるきっかけを作るこの黒いベレエ帽の老人が果たしている役割は、決して小さいものではない。透の前にも姿を見させていることからしても、この人物は何らかの意図をもって描かれていると考えるべきである。

畜生に転生する罪は精細に規定され、バラモンの殺害者は、犬、豚、驢馬、駱駝、牛、山羊、羊、鹿、鳥の胎に入り、バラモンの金を盗んだバラモンは、千回、蜘蛛、蛇、蜥蜴および水棲生物の胎に入り、尊者の臥床を侵した者は、百度、草や灌木および蔓草、又、肉食獣に生れかはり、穀物を盗む者は鼠となり、蜜を盗む者は蛇となり、牛乳を盗む者は鳥となり、調味料を盗む者は犬となり、肉を盗む者は秃鷹となり、脂肉を盗む者は鵝となり、塩を盗む者は蟋蟀となり、絹を盗む者は鷓鴣となり、亜麻布を盗む者は蛙となり、綿布を盗む者は鶴となり、牛を盗む者は大蜥蜴となり、香料を盗む者は麝香鼠となり、野菜を盗む者は孔雀となり、火を盗む者は蒼鷺となり、家具を盗む者は蜂となり、馬を盗む者は虎となり、婦人を盗む者は熊となり、水を盗む者は郭公鳥となり、果実を盗む者は猿なるのだつた。

〔『暁の寺』十六〕

上記『暁の寺』からの引用では、本多が『春の雪』で描かれる十九

歳時から読み続けている『マヌの法典』第十二章^③の中の輪廻転生を扱った部分より、特に罪人が畜生に生まれ変わることについて述べる部分が抜き出されている。

まず、黒いベレエ帽の老人の第一の落とし物——野菜屑——を、盗品と考えてみる。すると、上記引用『マヌの法典』には「野菜を盗む者は孔雀となり」とあるので、これに依拠すると、黒いベレエ帽の老人と孔雀の間に類縁が考えられることになる。果たして、本多が覗く黒いベレエ帽の老人の性交および傷害が起きる公園を本多は胎蔵界曼陀羅になぞらえ、自分が立っている場所に孔雀、明王の姿をイメージする描写がある。

月のない夜空にそびえる絵画館の円屋根を、大日如来の住する中台八葉院とするならば、池を隔てて今本多が立つてあるひろい車道は、虚空蔵院よりもさらに西寄り、あの孔雀明王が住する蘇悉地院のあたりだつたかもしれない。

〔『天人五衰』二十六〕

そもそも孔雀は、想像上の聖なる鳥である鳳凰に似ているとされており、『豊饒の海』においても、人物たちの運命を司る存在であるかのように何度も言及されている。特に『暁の寺』第二十二章は、かつて綾倉家に仕えていた老女・蓼科に本多がもらった「大金色孔雀明王経」に関する概説が大部を占めている。金色の孔雀に乗った明王のイメージも語られ、後に本多が見る夢の中で孔雀に乗った月光姫が登場する展開（『暁の寺』三十九章）につながることになる。また、この経を唱えたと蛇の毒が癒されるとも語られ、蛇に噛まれて死ぬことになる月光姫の運命との深い関連を思わせる[※]。

※ 一方、先にみた黒いベレ工帽の老人が女を刺す場面では、使用するナイフの刃が《蛇の舌》のような音を立てて飛び出てくる。「蛇の力を自在に操る者」孔雀」という見方もできよう。

先にも言及した、久松慶子が透に輪廻転生の秘密を明かし「あなたは贖物だわ」と言う場面（『天人五衰』第二十七章）では、慶子が孔雀をイメージした服を着ている——《胸もとは黄金のビーズの地に孔雀の羽根を象つた緑のビーズ、袖は紫のビーズの波つなぎ、下は裾にいたる葡萄酒色のつづき模様、裾は又紫の波形と金の雲、おのおの文様の堺は金いろのビーズで綴られてゐる》。その後透は失明し、「五衰」の運命をたどることになるが、その契機ともいえるこの場面の慶子は《胸もとの緑金の孔雀の羽根を存分に煌めかせて笑つた》——。

『春の雪』（第二十七章）で清頭と初めて性交する聡子の着物にも、孔雀ではないが、鳳凰のイメージが描き込まれている——《清頭は聡子の裾をひらき、友禅の長襦袢の裾は、紗綾形と亀甲の雲の上をとびめぐる鳳凰の、五色の尾の乱れを左右へはねのけて、幾重に包まれた聡子の腿を遠く窺わせた》。

本項でみた黒いベレ工帽の老人と孔雀の関係は、老人と孔雀の間に転生の因果関係が読みとれず、『暁の寺』にみられる、罪人が畜生に生まれ変わるといふ『マヌの法典』の記述をそのまま反映するものではない。しかし、黒いベレ工帽の老人が示す行動はまさに奇行というにふさわしく、透や本多との関わりもわずかではあるが印象的であり、それらを付き合わせると、「野菜を盗む者」と「孔雀」のつながりを述べた『マヌの法典』への着目もみちびかれる。というよりもむしろ、この黒いベレ工帽の老人は、以下検証する転生者たちと『マヌの法典』の関わりを暗示するためのキーパーソンとして造形されたともいえる

のではないか。

人間の始祖マヌの啓示にもとづくという『マヌの法典』は、その名のとおり古代インドにおける「法律」であり、来世への輪廻転生も、現世での善行・悪行の結果として語られている。物語の進行と共に、本多の転生追跡における最も大きな思想的基盤となっていくのが大乘仏教の唯識論であることはむろんだが、法律家である彼にとつては、この『マヌの法典』における転生観の意義も、相応の深さをもっているのではないか。本論はこれらの観点から、『豊饒の海』における『マヌの法典』と転生者たちとの関連を考察することを主眼とするものである。

序論二 「蝶」と「聖らかな獣」——『豊饒の海』創作ノートの検証

『豊饒の海』の創作ノート（平成版『三島由紀夫全集』所収）には、犯罪者から畜生への転生について書かれた部分がある。これも転生者たちと『マヌの法典』の関わりを考察に資するところがあるので、本論に入る前に見ておきたい。

△「奔馬」の問題

クーデターから独走して暗殺し、死刑に処せられる二十歳（成年）の少（「少」抹消）青年は、人を殺しても、王女に生れかへるか？ 次の章（「巻」の誤記か）との間に、「聖らかな獣」の章を入れるか？ さうすれば、第一章（「巻」の誤記か）のあとに「蝶」を入れるか？

第一章「巻」の誤記か)のあと、昭和四十七(四十二の誤記か)年

正月号に、「蝶」一篇を入れ、次の「殺人者」への暗示。

二月号から第二章「章」抹消)巻をはじめればよい。
第二巻のあと、「聖らかな獣」の章を挿入すればよい。

獣が身を犠牲にして人*を助ける故、王女に生れ変わる。

(この間、二年ぐらんとする)

* シヤム人。

(「春の雪」創作ノート)内は編集者による注記

上記の案からすると、人(清頭)↓畜生(蝶)↓人(勲)↓畜生(聖らかな獣)……という転生の順序が構想されていたことがわかる。むろんこの案は結局不採用になったわけだが、罪人が来世で人間ではなく畜生に生まれ変わるという点は、前項で引用した『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述の要所と同じであり、逆にいえば、『マヌの法典』にある犯罪者から畜生への転生が『豊饒の海』に描かれている可能性も示唆する。

ちなみに、『暁の寺』には上記の不採用案―「蝶」と「聖らかな獣」への転生がほめかされている箇所がある。本多がタイで月光姫に出会い、その足で向かったインドのアジャンタ洞窟寺院を訪れる場面である。

二条の滝のひとつは岩走つて断続し、ひとつは銀の縄目をなしてつづいてゐたが、いづれも幅のせまい、姿の鋭い滝だった。(中略)本多の目と滝とをつなぐ一線に、幾羽の黄いろい蝶がまっつはつて上下してゐた。

本多は滝口を見上げて、その目のくらむほどの高さにおどろいた。

あまり高いので、ここは次元を絶した世界が、そこから姿をのぞけてゐるかのやうだった。(中略)一匹の黒い仔山羊こやぎがその草を喰はんでゐた。そして、草よりもさらに高く、絶対の青空あざやかに、夥おびただしい雲が光りを含んで莊嚴に入り乱れてゐた。(中略)

滝が飛沫を散らしてゐる第五窟へ、いそぎたい心はやりと、足をとどめる畏怖とが、相争つてゐた。そこには多分何もないことはほぼ確実だった。しかしこのとき、熱に浮かされた清頭の一言が、本多の心に点滴のやうに落ちた。

「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」

――そののち彼は三輪山の三光の滝をそれと信じた。それはたしかにさうであつたらう。しかし清頭が意味した最終の滝は、このアジャンタの滝だったにちがひないと思はれた。(『暁の寺』九)

本多の意識にあるのはもっぱら清頭が言い残した「滝」であり、「蝶」や「仔山羊」は情景の一部としてしか描かれていない。しかし、上記創作ノートを手掛かりに、「蝶」と「仔山羊」を清頭と勲の転生した姿だと考えると、これが小説の結末部分だとすらいえる場面である。とはいへ、前後の場面とほとんど関連を持たない部分であるため、『暁の寺』全体を通読している読者が強い印象を持つことはほぼないだろう。加えて、創作ノートの情報は作品に含まれないものである以上、上記引用は不採用の素材の一部をさりげなく、半ば遊戯的に挿入した箇所といわざるをえない。

しかし、当初は「聖らかな獣」として漠然と構想されていたものが、上記引用『暁の寺』における「仔山羊」になっているのだとすれば、

三島の中で『マヌの法典』が犯罪者から畜生への転生の典拠として意識されていたことを示す傍証とはなりうる。序論一でみたように、

『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述には《バラモンの殺害者は、犬、豚、驢馬、駱駝、牛、山羊、羊、鹿、鳥の胎に入り》とあり、この「山羊」が「仔山羊」として登場していると考えられるからである。

だが、『春の雪』の主人公が何らかの罪を犯して「蝶」に生まれ変わるといふ展開は、『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述のみならず、犯罪者から畜生への転生事例をより多く述べている『マヌの法典』原文——『マヌの法典』原文と『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述との異同については本論三参照——にも当てはまらない。具体的にいえば、『マヌの法典』には「蝶」に生まれ変わるといふ転生事例がみられない。このことは、三島が構想段階において犯罪者から畜生への転生に関し、『マヌの法典』以外にも典拠を持っていた可能性を物語る。*

※ 『春の雪』創作ノートには、《主人公Aと副主人公Bがそれぞれ交代して主人公になる。数学的事例。途中猫にもなる。》ともあるが、猫への転生事例も『マヌの法典』にはみられない。

完成後の『豊饒の海』には、仏陀の過去世が畜生であったという本生経の物語をタイからの留学生バツタナデイド王子が話す場面もあるが（『春の雪』三十三）、犯罪者から畜生への転生について多くの字数が費やされているのはやはり『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述であり、少なくとも執筆段階では最も重要な典拠となっていたことは疑いない。しかしここでは、三島が構想段階において犯罪者が畜生に転生するという展開を前提していたということを確認事項とするにとどめ、『マヌの法典』の持つ意味の大きさについては、次項以下の本論でおこなう清顕・勲・月光姫の転生の具体的な分析を通じて確認す

ることにしたい。

本論一 「郭公」と月光姫

「記憶と言うてもな、映る筈もない遠すぎるものを映しもすれば、それを近いもののやうに見せもすれば、幻の眼鏡のやうなものやさかに」

「しかしもし、清顕君がはじめからなかつたとすれば」と本多は雲霧の中をさまよふ心地がして、今ここで門跡と会つてゐることも半ば夢のやうに思はれてきて、あたかも漆の盆の上に吐きかけた息の曇りがみるみる消え去つてゆくやうに失はれてゆく自分を呼びさまさうと思はず叫んだ。「それなら、勲もなかつたことになる。

ジン・ジャンもなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私ですらも……」

門跡の目ははじめてやや強く本多を見据えた。

「それも心々ですさかい」

（原文一行空白）

——永い沈黙の対座ののちに、門跡はしめやかに手を鳴らした。

御附弟があらはれて、闕際に指をついた。

「折角おいでやしたのやし、南のお庭でも御覧に入れませう。私がない、御案内するよつて」

その案内する門跡の手を、さらに御附弟が引くのである。本多は操られるやうに立つて、二人に従つて、暗い書院を過つた。

御附弟が障子をあげ、縁先へ本多を導いた。広大な南の御庭が、

たちまち一望の裡にあつた。

一面の芝の庭が、裏山を背景にして、烈しい夏の日にかがやいてゐる。

「今日は朝から郭公が鳴いてをりました」
（『天人五衰』三十）

『天人五衰』の終盤、月修寺を訪ねた本多に対し、清顕のことを知らないと聡子が言い、生涯をかけた転生の追跡が空転する場面であるが、本論が注目するのは「郭公」である。序論一に挙げた『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述には、「水を盗む者は郭公鳥となり」とある。「水を盗む」というと、『暁の寺』における印象的な展開が想起される。

そして、プール。又しても本多は手をさしのべて、水面をかきまはした。夏の雲が磨硝子の碎片のやうになつた。出来上つて六日になるといふのに、まだ誰一人このプールで泳いだ者はなかつた。本多も梨枝と共に三日前からここへ来てゐながら、水の冷たいのを口実に一度も泳いでゐなかつた。

ただひたすら、ジン・ジャンの裸を見ようがために掘らせたプール。ほかの目的は何一つ重要でない。
（『暁の寺』四十一 傍点徳永）

本多が月光姫の裸を見たがる理由の中には、転生の印である三つの黒子を確認したいということもあるが、色欲もあることはいうまでもない。その後月光姫はこのプールに入るが、黒子は確認されず、所詮プールである以上月光姫の身体は水着に覆われており、本多の欲望はまったく満たされていないといえる。事実、その後寝室で久松慶子と性交する（全裸の）月光姫を本多は隣室の書齋の覗き穴から見、同時

に黒子も確認して満足を得るのである。

つまり、上記本多が自分の別荘に作らせたプールは本多に何らの益も与えなかつた、ということになる。そして、上記引用にあるように、このプールが月光姫のためだけに作られたのだとすれば、月光姫は本多から莫大な費用を奪つたことになる。当然その費用の中には、莫大な量の「水」の代金が含まれている。すなわち月光姫は、本多から「水」を盗んで、いる。ゆえに、『マヌの法典』の記述に拠るならば月光姫は郭公に転生することになり、『暁の寺』の続編（後日談）である『天人五衰』末尾の郭公は、月光姫の転生した姿であると考えることができる。

本論二 「猿」と勲

マハマンダバの回廊の壁は、蜿蜒とラーマーヤナ物語の壁画の連鎖に占められてゐる。

有徳なるラーマその人よりも、風神の光輝ある息子、猿神ハヌーマンは、絵巻のいたるところに躍動してゐた。（中略）

南画風の山々と初期ヴェネツィア派風の暗い背景の前に、極彩色の殿宇や猿神や怪物の軍があつた。暗い山水の上を、七彩の虹の色が鞭で手なづけてゐた。海からは怪魚がぬつと首をもたげて、橋上の軍勢に襲ひかからうとしてゐた。遠くに幽かな青い湖があり、暗い森かげをひつそりと歩む金鞍の白馬を、とある繁みから、剣を抜いて猿神は狙つてゐた。
（『暁の寺』二）

上記引用は、『暁の寺』冒頭、タイを訪れた本多が猿神ハヌーマンの壁画を見る場面である。この後、本多はまた少女時代の月光姫と出会うことになるが、ここでもハヌーマンの名が出てくる。

多分その遊戯はラーマヤナに関りのあるものだつたのであらう。姫が木の枝を剣のやうに扱つて、剽軽な仕草で、背を丸くして息込むのは、明らかに猿神を思はせた。女官たちが手拍子を打つて何か唱へるたびに、その形が種々に変化した。姫が一寸首を傾げると、そのとき渡つた微風に草花が首を傾げ、枝移りをする栗鼠がつと停つて首を傾げると、符節を合してゐるやうに思はれた。

(『暁の寺』五)

両引用場面とも、剣を持った猿神ハヌーマンへの言及がある。特に後者の引用直前、本多は、月光姫が清頭と勲にかかわる事件や年代の記憶を語り、自分の前世は日本人だと言つたのを聞いている。勲から月光姫への転生を意識し始めた本多にしてみれば、勲が要人を殺害するのに使用した短刀・自決するのに使用した小刀と、猿神ハヌーマンの剣が重なつて見えていてもふしぎではない。

上記引用のみでは、勲と月光姫のつながりがより強く印象づけられる一方で、猿神ハヌーマンは勲と月光姫をつなかりを暗示するための媒介としてしか認識しえない。しかしここに、『奔馬』における勲の死の直前の行動と、『マヌの法典』の記述を解釈コードとして加えると、ハヌーマンが特に「猿」の神であることが浮上する。序論一に挙げた『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述には、《果実を盗む者は猿になる》とあるが、果たして『奔馬』の中には、勲が「果実」を盗む場面

がある。蔵原武介を殺害した勲が、自決するために海の見える場所をめざす場面である。

——蜜柑は海に向つて段々畠で栽培されるのがふつうである。蔵原家の蜜柑畑は、あたかも籬壇のやうに、一株一株の蜜柑を、一区切ごとの段の上に配して、石垣で固められたその無数の段は、おの微妙な角度に日を受けながら、参差として海へ向つて雪崩れてゐる。

(中略)

勲は蜜柑を一つもぎとつた。そのとき手に短刀のないのに気づいた。枝々につかまつて、下枝を顔から避けて走つて来たあひだに、落したのであらう。

(中略)

やがて崖が一個所深くえぐられて、洞のやうになつてゐるところへ出た。(中略)

勲はそこに身をひそめて、はげしい鼓動を鎮めた。するのは潮騒と海風の音だけである。ひどく咽喉が乾いてゐたので、蜜柑の皮を乱雑に剥いて、まるごと房に喰ひついた。血の匂ひがした。蜜柑の皮には固まりかけた血が粘つてゐた。

しかしそれは、咽喉を潤した果汁の旨さを妨げるほどではなかつた。(『奔馬』四十)

引用にあるように、この蜜柑(果実)は蔵原家のものであり、勲はこれを盗んでいる。よつて、果実を盗む者は猿に生まれ変わるといふ『マヌの法典』に従うなら、勲が転生したのは月光姫ではなく、本

多が見た猿神ハヌーマンの壁画および月光姫が扮していた猿神ハヌーマンのイメージだったのではないかと考えられるのである（本多が見る猿神ハヌーマンが生物ではないという問題については結論を参照）。

なお、序論二でみたように、勲は人を殺しているので、『マヌの法典』の《バラモンの殺害者は、犬、豚、驢馬、駱駝、牛、山羊、羊、鹿、鳥の胎に入り》という記述により、これら猿以外の畜生に転生している可能性も考えられる。しかし、これも序論二でみた『奔馬』創作ノートにあつたように、人を殺す勲が人に生まれ変われるのかという問題を三島が解決（解消）すべき課題として考えていたこと、また、殺人者が転生する畜生が複数で確定が困難であること、さらに、蔵原武介が『奔馬』において不信仰者[※]として描かれていることで、勲の蔵原殺害は畜生への転生理由にはならないと三島が最終的に判断（納得）したのだと想像することができる。

※ 蔵原武介は伊勢神宮参拝の前日に牛肉を食べ、玉串の奉奠^{ほうどん}にあたり背中を搔き、玉串を尻に敷くという「瀆神」を犯し、勲の殺意が決定的になる（『奔馬』三十八）。獣肉食については仏教の禁忌であり、神道において決定的な禁忌とはいえないが、勲の信仰が仏教よりもまず天皇（神道）へ向かうものである以上、蔵原のふるまいを神道上の「瀆神」として認識したものと解釈すべきだろう。『マヌの法典』はバラモンの心得を説いているので、これを敷衍すれば、「バラモンを殺害する者」は「同じ信仰を持つ者を殺害する者」ということになる。神道上の「瀆神」をほぼ無自覚に犯した蔵原は、天皇（神道）信仰をもつ勲にとって同じ信仰を持つ者とはいえず、勲が「バラモン」だとすると蔵原は「バラモン」ではない——勲の蔵原殺害は『マヌの法典』にいう《バラモンの殺害》にはあたらないう——という理屈になる。

本論三 「熊」「虻」——清頭のゆくえ

ここで、序論一でみた『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述を再び確認しておきたい。

畜生に転生する罪は精細に規定され、バラモンの殺害者は、犬、豚、驢馬、駱駝、牛、山羊、羊、鹿、鳥の胎に入り、バラモンの金を盗んだバラモンは、千回、蜘蛛、蛇、蜥蜴および水棲生物の胎に入り、尊者の臥床を侵した者は、百度、草や灌木および蔓草、又、肉食獣に生れかはり、穀物を盗む者は鼠となり、蜜を盗む者は虻となり、牛乳を盗む者は鳥となり、調味料を盗む者は犬となり、肉を盗む者は秃鷹となり、脂肉を盗む者は鵝となり、塩を盗む者は蟋蟀となり、絹を盗む者は鷓鴣となり、亜麻布を盗む者は蛙となり、綿布を盗む者は鶴となり、牛を盗む者は大蜥蜴となり、香料を盗む者は麝香鼠となり、野菜を盗む者は孔雀となり、火を盗む者は蒼鷺となり、家具を盗む者は蜂となり、馬を盗む者は虎となり、婦人を盗む者は熊となり、水を盗む者は郭公鳥となり、果実を盗む者は猿なるのだつた。

（『暁の寺』十六）

先にみた月光姫から郭公、勲から猿（猿神）への転生に関わる記述が、当該個所の末尾に集中している。一方『マヌの法典』原文の当該箇所は段落で細かく分かれたれ、転生の事例もより多く、『暁の寺』で援用するに際して三島が省略や改変をおこなっていることがわかる（ちなみに加筆はない）。上記引用——『火を盗む者は蒼鷺となり』以下の部

分に相当する『マヌの法典』原文を見てみよう。

六六 火を盗むは蒼鷺となる。家具を(盗むは)蜂(の一種)、色染の布を盗むは鷓鴣(の一種)に生る。

六七 鹿或は象を(盗むは)狼、馬を(盗むは)虎、果實及び根を(盗む)は猿、婦人を(盗むは)熊、水を(盗む)は郭公鳥、車乗を(盗むは)駱駝、家畜を(盗むは)山羊(となる)。

(田辺繁子訳『マヌの法典』第十二章)

『暁の寺』の当該箇所と比較すると、(水を盗む者↓郭公鳥)と(果実を盗む者↓猿)の順序が変更され、原文ではこの二つの転生事例の間にあった(婦人を盗む者↓熊)が『暁の寺』では(二事例の)前に移動している。さらに、原文ではあった転生事例(車乗を盗む者↓駱駝)(家畜を盗む↓山羊)が『暁の寺』では省略されていることも確認できる。これらの細かい(少なからず不可解な)改変・省略と、月光姫ジレンヤンと勲が「郭公」と「猿」に転生するという解釈を付き合わせてみると、『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述の末尾——『暁の寺』第十六章の末尾でもある——に「猿」と「郭公」の転生事例があるということも、読者の目を引きつけるための操作ではなかったかと思われるのである。

このように考えると、『マヌの法典』原文では「猿」と「郭公」に挟まる形で語られ、『暁の寺』の当該箇所では「郭公」と「猿」の前で語られている「熊」への転生事例——《婦人を盗む者は熊となり》に着目せざるを得ない。たしかに『春の雪』の清頭は、宮家と婚約の決まった聡子を奪う——婦人を盗むからである。聡子との情交は、清頭の

行動の中で最も重要なものであるだけに、清頭から「熊」への転生を検証せねばならない。

ところが『春の雪』の続編である『奔馬』に、畜生(動物)としての「熊」は登場しない。しかし、「熊」と関わりを持つ描写がないわけではない。

「どうしてみんな帰らんのだ。これだけ言はれても、まだわからんのか」

と勲は叫んだが、これに応ずる声は一つもなく、しかも今度の沈黙はさつきとは明らかにちがつて、何かの闇の中から温かい大きな獣が身を起したやうな感じのする沈黙だった。勲はその沈黙に、はじめてはつきりした手応へを感じた。それは熱く、獣臭く、血に充ち、脈打つてゐた。
(『奔馬』十八 傍点徳永)

上記引用は、仲間の意志を確かめるため蹶起の疑似召集をかけた勲が解散を命じている場面である。傍点を付した《闇の中から温かい大きな獣が身を起した》という描写は、穴蔵を這い出てくる熊の描写と思えなくもない。加えて、勲たちは熊本神風連に心酔し、昭和の神風連たらんとして蹶起の計画を練っている。先に述べた「獣」という形容と、熊本神風連の「熊」という文字を付き合わせると、勲の周辺に「熊」がいる、と考えることはできる。しかし、かなり強引な解釈であることはいうまでもない⁵⁾。

また、「熊」ではなく、「虻」への転生を思わせる描写もある。本多が勲を最初に見る、剣道試合の場面である。

掃き清めた試合場の土に虻が一点の影を落して静止するかと思へば、来賓席の白布を敷いた長テーブルのところへ来て、唸りを急に耳もと近く聴かせたりした。(中略)

本多の目はともすると、丁度真向ひの飯沼の息子の顔へ惹き寄せられた。二十年むかし、自分や清頭より五歳ほど年長であった筈だが、それでも一人の田舎書生にすぎなかつた飯沼が、今こんなに大きな息子の父親になつてゐることを思ふと、子供を持たない自分がいつのまにか置き忘れてゐた年齢の追跡してくる感覚に目ざめさせられた。

(『奔馬』四)

轟々たる青嵐の合間に、静けさが点滴のやうに滴たつて来て、虻の飛びすぎる羽音が耳立つたりする。杉の幾多の槍の穂先に刺されたかがやかしい空。動く雲。日光の濃淡を透かした葉桜の葉叢。

……本多はわれにもあらず幸福になつた。(中略)

本多の顔を見るや、一人が友をつついて、滝を離れて、おのがじし丁寧に頭を下げた。滝を譲らうとしたのである。

本多はその中に飯沼選手の顔をすぐに認めた。譲られるままに滝へ向つて進む。すると、棍棒で打ちのめされたやうな水の力を、肩から胸に感じて飛び退いた。

(『奔馬』五)

二つ目の引用の後、本多は勲の脇腹に転生の印である三つの黒子を見ることになるが、ここでは二つの場面で「虻」が登場していることに注目したい。『晝の寺』所収『マヌの法典』関連記述には「蜜を盗む者は虻となり」とあるが、『春の雪』で清頭と聡子が初めて接吻を交わす場面に、「蜜」の描写がある。

清頭の中の不安がのこりなく拭はれて、はつきりと幸福の所在が確かめられると、接吻はますますきつい決断の調子に変わつて行つた。それにつれて聡子の唇はいよいよ柔らかいだ。清頭はその温かい蜜のやうな口腔の中へ、全身が融かし込まれるやうな怖ろしさから、何か形あるものに指を触れたくなつた。膝掛から抜いた手で、女の肩を抱き、顎を支へた。そのとき女の顎にこもる繊細なもう骨の感じが彼の指に触れ、ふたたび別な肉体の、はつきりと自分の外にある個体のすがたが確かめられたが、今度はそれが、却つて唇の融和を高めるのであつた。

(『春の雪』十一 傍点徳永)

上記引用の「蜜」もまた比喻ではあるが、清頭は聡子の「蜜」を盗んでいるといえないこともない。「唇を盗む」という言い回しもあるように、接吻に付随する「盗み」のイメージとも呼応する。

しかし「熊」にせよ「虻」にせよ、清頭からの転生については、先に見た勲から猿(猿神)、月光姫から郭公への転生ほど明らかな証拠がない。このことが何を意味するのもも含め、『豊饒の海』のメインモチーフともいえる唯識論との関わりを次項で考察し、結論としたい。

結論 唯識論との関わり

『豊饒の海』が「世界解釈をテーマとする小説」であるということは、作者である三島自身が述べている。その世界解釈の思想的基盤といえるのが大乘仏教における唯識論である。『春の雪』で出家する聡子も、

月修寺で唯識論を学び、また本多も『春の雪』で描かれる青年期から唯識論に触れ、『暁の寺』で描かれる壮年期にいたって「阿頼耶識」という唯識論における核心部分の理解を得る（『暁の寺』十八・十九）。

われわれはふつう、六感といふ精神作用を以て暮してゐる。すなはち、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識である。唯識論はその先に第七識たる末那識といふものを立てるが、これは自我、個人的自我の意識のすべてを含むと考へてよからう。しかるに唯識はここにとどまらない。その先、その奥に、阿頼耶識といふ究極の識を設想するのである。

(中略)

さて、阿頼耶識には、あらゆる結果の種子が植ゑつけられる。前に述べた七識が、生き（原文のママ）のかぎり動きまはるその活動の結果はもとより、さういふ心法の活動のみならず、その対象たる色法の種子までも、心法に伴はれて、ここに植ゑつけられるのである。この植ゑつけられることを、衣服にたきこめられた香の薫りが移るのたとへて、熏習といひ、これを種子熏習と呼ぶのである。

（『暁の寺』十八）

井上隆史によれば^(七)、本多が唯識論から得たのは、輪廻転生と世界解釈、二つの理論的裏付けである。阿頼耶識について、興福寺貫主・多川俊映は『私たちのしてきたことの、その痕跡をしっかりと保持しつつ、なお間断のない心の潜在的な領域』と述べ、前世や前々世と現世のつながりにふれた上で、『私たちの阿頼耶識には、単に、誕生日以来のすべての行為の気分・痕跡が蓄積されているばかりではなく、永

遠の過去以来の行為・行動の種子が熏じられて保有されてあるということになります』と述べている^(八)。本多が理解した輪廻転生の主体である阿頼耶識とは、このようなものだろう。

一方、上記引用ほか『豊饒の海』で描かれている唯識論は、特に世界解釈にかかわる部分で本来の唯識論から変質していると前掲井上は指摘する。井上は『天人五衰』の透の述懐——『船が僕に、もし露ほども疑ひを抱いたら、その瞬間に船は僕の観念によつて爆破されてゐたであらう』（第二十四章「本多透の手記」）にふれ、ここにいたつては唯識論が「独我論へと転落している」と述べる。つまり、自己の認識のみが世界を生成しているかのようを考える、「唯識」という言葉の意味を表面的にとらえた世界観に透はとらわれている、ということである。世界の認識と生成が同義になつているといつてもいい。たしかにこの傾向は、認識の権化のような透と相似形をなす老境の本多にも共有されている。本多が透と婚約者の百子を見ている場面では、端的にその「独我論」が露呈する。

本多は見えてゐるのではなかつた。認識者の目で覗き穴から覗いてゐるのではなかつた。明るい夕光の公明正大な窓辺に立つて、自らの自意識が、命じたとほりに動くさまを、片や心の中で自ら演じ、片や全能の力で指揮してゐるのだつた。

『お前たちは若いのだから、何かもつと莫迦々々しい活力の証拠を見せなければならぬ。雷鳴を与へようか。突然の稲妻を与へようか。何か奇矯な電気現象を与へようか。』（『天人五衰』二十三）^(九)

上記のような傾向をもつ『豊饒の海』における唯識論について、井

上は『豊饒の海』執筆を通じて三島が成し遂げようとした世界解釈の失敗の反映ととらえ^①、柴田勝二は井上の説もふまえた上で、三島の唯識論理解の偏向を指摘する^②。両者の論考は唯識論の原典を精査し、先に見た独我論的傾向を帯びる『豊饒の海』における唯識論の誤りを的確に指摘しており、論者（徳永）も妥当と考える。

たしかに、『暁の寺』における唯識論の概説部分は特に物語の進行から遊離しており、三島自身の唯識論理解をそのまま述べている印象が強く、作中人物である本多の唯識論理解の偏向をあえて自覚的に描いたものとは考えにくい。本多の唯識論理解の偏向は、そのまま三島のものでもあるだろう。

だが、本論で見た『マヌの法典』に依拠する畜生への転生は、唯識論理解の偏向があつてこそ成り立つ。すなわち、すべての経験や記憶（種子）^③が心の深層部分—阿頼耶識に定着（熏習）し^④、その後の世界の認識—「独我論」に陥つた本多にとつては世界の「生成」と同義—に反映するとするならば、『マヌの法典』を学んだ本多の阿頼耶識が、転生者たちの畜生への転生を認識—「生成」してもふしぎではないからである。むろん本多は、『マヌの法典』が述べる畜生への転生を清頭・勲・月光姫^⑤にあてはめて考えることはなく、人から人への転生を追つて挫折する。しかし、阿頼耶識は心の深層に位置するものであり、その反映が現実世界に現れていたとしても、当の本多がそれに気づかない^⑥ということはあり得る。つまり、本論でみた郭公・猿・熊・蛇などに本多は出会ひ、認識もしているが、それらを転生者達が転生した姿^⑦とは認識していない、ということである。

ちなみに、本論が提示する解釈—猿が「猿神」の壁画であつたり、熊が「熊本」という地名の文字にすぎなかつたり、また、清頭からの

転生が熊と蛇という複数にまたがるというのも、『マヌの法典』それ自体よりも、『マヌの法典』を学んだ本多の阿頼耶識が反映した結果だと考えると合点がいく。物体とイメージが錯綜する夢の世界と同じように、本多の精神世界（阿頼耶識）にとつては畜生が本物の動物でなくとも、また、転生が複数の道筋に分岐したとしても、それらと連なるイメージを喚起する素材があれば、その時々^⑧の状況に応じて畜生への転生を認識—「生成」しうるからである。

本多の表層の意識では、清頭から勲への転生が疑われることはなく、勲から月光姫への転生にいたつて疑いが生じる。この経緯は、清頭から畜生への転生がはつきりせず、強引に見出そうとしても熊と蛇に分岐していたり（蛇への転生の曖昧さについては補論一参照）、勲から猿（猿神）への「転生」がたんなるイメージや壁画としてしか登場しないことなどと比べ、月光姫から転生する郭公が実際の郭公鳥であることと響き合う。すなわち、人から人への転生への疑いが増していくに従い、『マヌの法典』に依拠する畜生への転生がより確かなものとして前景化してくる、ということである。

本論は、『マヌの法典』に依拠した転生を、第四巻『天人五衰』からさかのぼる形で見てきたが、作品の時系列に沿つて並べ直し、上記の考察を再説してみよう。

第一の転生者—松枝清頭↓熊？

↓蛇？

第二の転生者—飯沼勲↓猿（猿神）

第三の転生者—月光姫↓郭公

先に述べたように、清頭から畜生への転生がもつとも曖昧で、確定的なものとはいえない。しかし逆にいえば、本多が清頭から勲への転生に疑いを持っていないということと呼応している、ともいえる。

『豊饒の海』で描かれる人から人への転生のうち、もつとも明確な根拠が示されているのが清頭から勲への転生である。勲は清頭と同じく三つの黒子を持ち、滝の下で本多と出会い、人生そのものを燃焼し尽くすような行動をとり、夭折する。

清頭から始まる人から人への転生と、本論で見てきた『マヌの法典』に依拠した人から畜生への転生、いずれも本多の阿頼耶識の反映だとすれば、清頭と同じ年であった頃の本多の若い情熱が人から人への転生を信じる意志力の強さを——人から人への転生を保証する阿頼耶識の確かさを——生み、結果として、畜生への転生というネガティブな事態はかすかな痕跡のようなものしか現れなかったとはいえないだろうか。

本多は、清頭の情事を見ることがはなかつたが、清頭から勲への転生を疑うことはない。勲の殺人も本多は実見することはないが、月光姫への転生を半ば信じている。しかし、老いは始める本多の阿頼耶識は人から人への転生を保証する力を徐々に失い、先にみた「独我論」に陥っていくその過程で、若干の曖昧さが生じてくる。月光姫の肉体が情事にのぞんで情熱的に蠢くのを、見なければ、本多は勲からの転生を信じることができない。それは、一瞬だけ甦る意志力の「回春」であったと考えることができる。いいかえれば、『暁の寺』後編における本多の阿頼耶識は、対象物（月光姫）がもつとも情熱的に躍動する「現場」を見なければ奮い立つことがなく、人から人への転生も保証しなくなっている、ということである。

透にいたっては、三つの黒子という外形的なものだけが清頭と共通するだけで、行動よりも認識に情熱を傾ける、むしろ本多に似た人物である。本多は透を転生者として自ら「選択」し、やがて彼が「贗物」であると気づいていく。本多の老いが進むとともに、人から人への転生が不確かなものになり、反比例的に、人よりも畜生へ——勲から猿へ、月光姫から郭公へ——の転生のほうが前景化してくる。この経緯は、本多の阿頼耶識の弱体化（老衰）と呼応しているのではないだろうか。

『豊饒の海』執筆にあたって三島が当初考えていた結末案が、『春の雪』創作ノートにある。（編集者の註に〈INDEXの次のページの余白にホツキクスで留められた原稿用紙〉とあるので執筆時期は不明だが、第一巻の創作ノートに留められていることからしてかなり早い段階で書かれたものと思われる。）

第四巻——昭和四十八年。

本多はすでに老境。その身辺に、いろいろ一、二、三巻の主人公らしき人物出没せるも、それらはすでに使命を終りたるものにて、贗物也。四巻を通じ、主人公を探索すれども見つからず。つひに八十（八十）抹消。七十八歳で死せんとすとき、十八歳の少年現はれ、宛然、天使の如く、永遠の青春に輝けり。（今までの主人公が解脱にいたつて、消失し、輪廻をのがれしとは考へられず。第三巻女主人公は悲惨なる死を遂げし也）

この少年のしるしを見て、本多はいたくよろこび、自己の解脱の契機をつかむ。

思へば、この少年、第一巻よりの少年はアラヤ識の権化、アラヤ識

そのもの、本多の種子たるアラヤ識なりし也。

本多死なんとして解脱に入る時、光明の空へ船出せんとする少年の姿、窓ごしに見ゆ。(バルタザールの死)

(「春の雪」創作ノート「」内は編集者による注記)

上記引用をみると、『豊饒の海』全体における中心人物は本多であり、最後の転生者も、本多の阿頼耶識が具現化させた理想の人物像のようなイメージで構想されていたことがわかる。そして、上記引用と完成した『豊饒の海』の結末を比較すると、先に述べた「世界解釈(三島にとつて望ましい、「世界」像の描出)」という目論見の破綻——独我論に変質してしまう三島の唯識論理解の限界が、より強く実感される。

しかし、その破綻——本多が転生者を見失う空転の結末——は、三島自身の予測の中にふくまれていたのではないかとも思える。というのは、畜生への転生にまつわる記述が創作ノートに散見され、また、『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述(第十六章)と、本多が唯識論の核心部分として「阿頼耶識」を把握する部分(『暁の寺』第十八く十九章)とが近接していることから、唯識論に依拠する人から人への転生が空転の結末を迎えた場合の弥縫策として、『マヌの法典』に依拠する畜生への転生がはじめから並立的に織り込まれていたことを物語るからである。弥縫策も用意しつつ書き進められていたということは、そもそも三島自身、唯識論の援用による世界解釈の可能性に半信半疑であったとすら言え、世界はまったく偶発的・無機的・無根拠に存在しているという、彼の虚無的な世界観を読みとらざるを得ない。

補論一 本多が見ていないもの

本論でみた『マヌの法典』に則る畜生への転生がすべて本多の阿頼耶識の反映だとしても、その解釈において、本文以外の要素を補うことでしか成り立たない事例がある。

まず本論三で見たと、清頭が聡子との接吻で「蜜」を盗み、蛇に転生する事例である。本多は清頭と聡子が情交をおこなったのを知っているが、清頭が「蜜」を盗む場面を見たわけではない。しかし、若い頃の本多が女性の(または聡子の)口腔に「蜜」の存在を想像しており、女性(聡子)との情交は「蜜」を盗むことと同義だと考えていたとすれば、「蛇」への転生は成り立つことになる。

『春の雪』の時点の本多が童貞であったことは、聡子が妊娠し、それを知らぬ清頭が聡子に会えないことを嘆く以下の場面で確認できる。

「きいてくれ。彼女はもう僕と寝てくれさうもないんだ」

本多の顔には、童貞らしい混迷があらはれた。

(『春の雪』三十八)

また『暁の寺』には、本多と再会した蓼科が《本多さんもお姫様には申し召しがおありになつたのでせう。わかつてをりましたよ》(第二十一章)と言う場面がある。『春の雪』には、本多を誘惑するかのような行動をとる又従兄妹・房子とのエピソードがあるが、本多は房子に恋情を抱くことはない。この頃の本多にとつての女性とは聡子以外の何者でもなかったとも言え、聡子の「蜜」を清頭が盗んだ(盗まれ

た)と本多が考えていたとしてもふしぎではない。[※]

※ 本多は、鎌倉の別荘で清頭と逢い引きする聡子を車で送迎するが、小さい聡子を「房子」と呼ぶ。聡子の出自を運転手に悟られないための偽装だが、ここに、認識者・本多と行動者・清頭の対照を見ることができ、本多にとつての房子は血縁者であり、本多が房子に恋情を抱かないのはインセスト(近親姦)・タブーの意識もあるはずだが、清頭にとつての聡子も、血縁者ではないが幼少期を姉弟のように過ごした、考えようによっては本多にとつての房子よりもさらに深いインセスト・タブーの対象である。つまり『春の雪』前半で描かれる清頭の逡巡は、本多が房子に対して抱く逡巡と通ずる面があり、聡子との情交へ進んでいく清頭の述懐(『優雅といふものは禁を犯すものだ、それも至高の禁を』(『春の雪』二十五)における「禁」には、宮家との縁談を省みないということのほか、姉弟のような関係の聡子と交わるといふことも含まれているはずである——ちなみに三島の戯曲『熱帯樹』(一九六〇—昭和三十五年)では兄妹の情交が描かれている——。宮家との縁談という要素を切り捨てて考える場合、房子との「禁」を犯すことのない本多が聡子に惹かれるのはむしろ当然の成り行きとすら言え、本多は清頭に聡子を奪われた(盗まれた)と考えることもできる。上記、鎌倉への送迎車中の描写(『……本多は友人の女と二人でかうした深夜のドライブをすることの、ふしぎな味はひを知った。(中略)それは「他人の女」であつた。しかも無礼なほどに聡子は女だつた。本多は自分に対する清頭のこんな信頼に、ずつと彼らのふしぎな絆(きずな)であつた清頭の冷たい毒が、かつてないほど鮮やかに甦(よみがへ)るのを感じてゐた。』(『春の雪』三十四)にも、本多の聡子への想いがかすかに描き込まれている。

『奔馬』の勲から猿への転生も、本文以外の要素を補足せねば「成立」

しない。というのは、本多は勲が蔵原を短刀で刺し、切腹して死んだことは知っているが、果実泥棒のことは知らないはずだからである。しかしそれを補完するように、本多が果実泥棒に出会う場面がある。

「婦人能(かんな)だわ。神歌(かみうた)、高砂(たかさぎ)、八島(やしま)のつぎに、羽衣(やい)をやつたのも女だわ」

と慶子は昂奮して叫んだ。

その昂奮のつづきで、かへるさの参道の桜並木から、一粒の桜桃をつまんで喰べた。(『天人五衰』九)

上記引用は、『天人五衰』で久松慶子と本多が三保の松原を訪れている場面である。害虫駆除の毒があることを本多は指摘し、《それを喰べたら死ぬよ》と言う。はからずも本多はここで、「盗み」による報いについて語っている。

当然これは時系列でいえば『奔馬』の後日談であり、勲から猿(ハヌイマン)への転生に関与するわけではない。そもそも本論二でみたように、『暁の寺』で猿神(ハヌイマン)の壁画を見、猿神(ハヌイマン)に扮して遊ぶ月光姫(ジンジヤン)を見て本多は勲の果実泥棒を想像することもなく、清頭と勲の記憶を語る月光姫(ジンジヤン)が勲の生まれ変わりだと考え始める。しかし、自ら選んだ転生者・透(トウ)が「贖物」であることがやがて明らかになっていく『天人五衰』で果実泥棒に出会つた本多は、かつて見た猿神(ハヌイマン)のイメージを勲の転生(ハヌイマン)だと考え直し、そこから遡(さかの)って、勲の果実泥棒を想像することはあり得る。《唯識論は、阿頼耶識(アライエシキ)による因果は「同時」に、すなはち一刹那(いつせつな)に、しかも更互(いっせつな)に起ると説く》(『暁の寺』十九)という記述をふまえると、第四卷『天人五衰』における慶子の果実泥棒を本多が見るから

こそ、第二巻『奔馬』から第三巻『暁の寺』における勲の果実泥棒による猿神への転生が成立する、と考えるべきかもしれない。いずれにせよ、慶子の果実泥棒もまた勲の果実泥棒と同じく唐突で、両場面に響き合うものを読みとるべきだろう。

結論でも述べたように、上記二事例の解釈にこのような補足が必要になるのは、月光姫や透に比べ、清頭や勲が人に転生するということに対する本多の疑いが少ないゆえ、自然、『マヌの法典』に拠る畜生への転生はかすかな兆候のようなものとしてしか現れない——本多はそれを意識することもなく、転生が認識できる素材である「盗み」や畜生（動物）との出会いも曖昧な場合が多い——からだと考えられる。

補論二 「盗み」の系譜への暗示

『春の雪』には、他にも「盗み」のエピソードがある。タイからの留学生・パツタナデイド王子の指環盗難である。結局この指環は見つからず、『暁の寺』の時代、戦後になって皇族の籍を失った洞院宮（聡子が嫁ぐはずだった宮家）が営む骨董屋で売られているのを本多が購入し、月光姫に渡すことになる。本多はこの指環を購入するとき《あのとき失はれた指環は、実は盗まれたのであつた》（『暁の寺』二十四）と知ることになる。誰が盗んだのかについては、店の者も出自を明かさず、《どうせ旧華族の家から出たものであるとすれば、金に困つてこれを処分した男は、本多と同時期に在学した者だと考へられる》（『暁の寺』二十四）という、学習院の同窓生の誰かが犯人であろうという想像をもって本多の追及はおわるのだが、この犯人が、清頭であると

したらどうだろう。

指環盗難の後、失意のパツタナデイド殿下と従兄弟のクリツサダ殿下を慰めるため、松枝侯爵（清頭の父）は鎌倉の別荘へ二人を招く。

侯爵は清頭とも相談して、夏休みがはじまつたら、王子たちを松枝家の海辺の別荘へ招き、そこへ清頭をつけてやることにしたのである。
（『春の雪』三十 傍点徳永）

この別荘行きには本多も同行することになるが、清頭はこの機会を聡子との逢瀬に利用する。上記引用傍点部分にあるように、別荘行きには清頭の意向も関与していることは明らかであり、当初から聡子と逢い引きすることを目的として指環を盗んだということも考えられる。ちなみに『暁の寺』の時代になると松枝家は没落しており、養嗣子になった者も放蕩者で、土地や財産を次々に失う境遇にある（『暁の寺』二十一）。清頭が松枝邸——邸宅の地所は狭くなつても住所は基本的に変わっていないので、『暁の寺』の時点で残っている邸宅は清頭の時代と基本的には同じものと知れる——のどこかに隠しておいた指環を発見した養嗣子が、その出自を知らぬまま売飛ばすことは充分にありうるだろう。

なお『マヌの法典』原文には、《貪慾より寶石、眞珠、珊瑚、或はその他種々の貴重品を盗みたる者は、金工の間に生る。》というくだりがあるのだが（第十二章六一）、『暁の寺』所収『マヌの法典』関連記述では省略されている。「金工の間に生まれる」という状況は本論でみたような畜生への転生よりもはるかに印象が強くなり、勲への転生との併存も描きにくい。省略されたのではないだろうか。

いずれにせよ、『春の雪』における指環盗難は『豊饒の海』に登場する「盗み」の中で最も印象深いエピソードと言える。まず第一巻で転生者と「盗み」の繋がりを暗示しておく意図があつたのではないかと思われ、序論一でみた黒いベレエ帽の老人のエピソードとともに、『マヌの法典』への注目をみちびく目印の役割を読みとることができる。

註

(一) 村松剛『天人五衰』の主人公は贖物か(新潮社『三島由紀夫全集』(昭和版)第十八巻付録 一九七三年七月)『西欧との対決—漱石から三島、遠藤まで—』新潮社 一九九四年二月)

(二) 『マヌの法典』の原テキストについては、主として田辺繁子訳のものを参照する(岩波文庫版 一九五三年初版)。ちなみに、『豊饒の海』において本多繁邦が初めて接する『マヌの法典』は、『L・デロンシャンのフランス訳』ということになっている(『春の雪』第七章)が、本論で引用した『暁の寺』第十八章の訳語をみる限り、三島が田辺繁子訳『マヌの法典』を参照していることはまず疑いない——『定本 三島由紀夫書誌』(蕃薇十字社 一九七二年)の蔵書目録には『マヌの法典』田辺繁子訳(岩波文庫)岩波書店 29・7・20とある——。『春の雪』の舞台は大正初年であり、上記デロンシャン訳『マヌの法典』は一八三三—天保四年、一方田辺繁子訳『マヌの法典』は一九五〇—昭和二十五年初版発行であることを考慮した設定だったと思われる。

(三) この郭公に着目した論考に島内景二「琥珀の中の虫「女なるもの」との戦い」(河出書房新社「文藝別冊 総特集 三島由紀夫 没後35年・生誕80年」二〇〇五年)がある。三島が『小説家の休暇』(一九五五—昭和三十年)や『小説とは何か』(一九七〇—昭和四十五年)で言及している永福門院の歌に「ほとと

ぎす(郭公)」を歌ったものがあることを指摘し、聡子のモデルが永福門院であると指摘する。本論とは論点が異なるが、興味深い指摘である。

(四) 蔵原武介の蜜柑畑については他にも言及箇所があり、明確な意図をもって描かれていたことが窺える。以下、該当箇所を挙げておく。

蔵原武介は夏の週末は軽井沢ですごし、そのほかの週末は伊豆山ですごした。その伊豆山には二、三町歩の蜜柑畑も持つてゐて、自家の蜜柑のあたたかい光沢と甘味を自慢にし、知人にばかりか、二、三の施療院や孤児院に寄贈して喜ぶこの人が、どうして或る人々の怨嗟うらみの的になつてゐるのか、理解することはむづかしかった。(『奔馬』十五)

急いでゐたので、タクシーに乗つて、新橋駅へ行き、熱海行の汽車に間に合つた。汽車は空いてゐた。四人乗りの席を一人で占め、ポケットから雑誌の切り抜きを取り出して、読み返した。それは佐和から借りた新年号の講談倶楽部の一頁を切り抜いたのである。

「政界財界大物の年末年始」と題した囲みの記事である。そのなかに、蔵原については、かう書いてある。

「蔵原武介氏の年末年始は、ゴルフをするでもない、簡素そのもので、毎年御用納めのとたんに熱海伊豆山稲村の別荘にもぐり込み、自慢の蜜柑畑の手入れをして暮すのが何よりのたのしみ。隣近所の密柑山は、大てい年内に採果するが、蔵原家だけは、松の内まで、枝もたわな蜜柑をそのままにして鑑賞し、その後採つた蜜柑は、知人に配るほか、施療院や孤児院へ悉く寄附される。財界のローマ法王ともいふべきこの人の、素朴な人柄、麗しい人情を語つて余りある」

(『奔馬』四十)

また、決起の同志と計画を練っている場面で、勲が「ぼん柑」を小道具にして説明をする描写があるので以下に挙げておく。この描写も、勲と「果実」の関わり——蜜柑とぼん柑の近似性もふくめ——を前もって示しておいた場面と考えると興味深い。

水菓子と茶を持つて来てくれた母の遠ざかる足音に耳を澄ませてから、勲は鍵のかかった抽斗ひきだしをあけた。折り畳んだ地図をとり出して、畳にひろげた。東京市中心部の地図のそこかしこが紫の色鉛筆で塗り潰されてゐる。

「この通りだよ」

と勲は嘆息をまじへて言った。

「こんなにかい」

と井筒がきいた。

「さうだ。もうこんなに腐つてゐるんだ」

と勲は鉢からぼん柑の一つを手にとつて、その黄いろく光る溶岩のやうな肌を撫でながら、

「もし果物の中心部がこんなに腐つてゐたら、とても喰へやしない。捨てる

他はないぞ」

と言った。

(中略)

「これをみんな一挙に清めるためにはどうしたらいいんだらう」

「神風連は嘆くだらうが、一挙にやるにはこれしかないよ」

と勲は、手にしてゐたぼん柑を、高くあげて地図の上に落した。ぼん柑は重苦しく弾けて、張合ひのない音を立てて、斜めにころがりかけ、そして日比谷公園のあたりを覆うて止つた。

(『奔馬』十二)

(五) ちなみに、三島由紀夫『夏子の冒険』のクライマックスは熊退治であるが、

熊が出現する間際の第二十七章の章題は「闇くろにうごめくく物影」であり、本論でみた『奔馬』における《闇くろの中から温かい大きな獣が身を起した》というくだりが、「熊」をイメージして描かれているのではないかという想像を惹起する。また『奔馬』第二十三章には、勲が山に入り村田銃で雉子を撃ち殺して神道の指導者に戒められる場面があるが、『夏子の冒険』で夏子が手にするのも村田銃である。そもそも『奔馬』における勲の雉子殺しは、天保時代、三島の生家である平岡家の先祖・太左衛門が、藩の禁制である山での雉子射ちをおこない、庄屋の地位を失い、転居(所払い)を命じられたことをふまえているものと思われるが、『夏子の冒険』の主人公・夏子の名が三島(平岡公威)の父方の祖母の名と同じであること、また、武家(旧幕臣永井家)に生まれ宮家(有栖川宮家)に預けられた祖母・夏子の境遇が『春の雪』の清頭と共通していることなどを勘案すると、『豊饒の海』と『夏子の冒険』に一定の繋がりを見出せないこともない。上記平岡家の歴史については松本健一『三島由紀夫亡命伝説』(河出書房新社 一九八七年)・村松剛『三島由紀夫の世界』(新潮社 一九九〇年)などを参照。

(六) 『豊饒の海』について(『毎日新聞』一九六九年二月二十六日↓全集三十五巻) なお、このエッセイの掲載日が「二月二十六日」なのは、三島が強い共感を寄せていた二・二六事件を意識してのことだろうが、『春の雪』の清頭が出家した聡子を訪ねて月修寺を訪れるのも二月二十六日に設定されており、そもそも『春の雪』という題名も、二・二六事件当日の雪を意識して付けられたものと思われる。また三島は一九六五年、『春の雪』の取材のため、月修寺のモデルである奈良・帯解の円照寺を訪れているが(松本徹二編著『年表作家読本 三島由紀夫』河出書房新社 一九九〇年による)、この訪問日にも二月二十六日を選んでおり、昭和期のテロリズムを描く『奔馬』よりもむしろ『春の雪』のほうに二・二六事件への思いを込めているのかとも思える。上記清頭の月修寺訪問日に言及した先行文献としては、大島一郎『感情の戦士——『春の雪』鑑賞——』(一

九七九年「淑徳国文」第二十号・石田恵子『豊饒の海』試論——『豊饒の海』の結末部分と『花ざかりの森』との比較について——（一九八二年「立教大学日本文学」第四十九号）などがある。

(七) 井上隆史『豊饒の海』における輪廻説と唯識説の問題（至文堂「国語と国文学」一九九三年六月）なお井上は『豊饒の海』における世界解釈の問題

（至文堂「国語と国文学」一九九四年九月）で、唯識思想の所説一般を「唯識説」と呼ぶのに対し、「唯識論」とは法相宗およびその根本聖典『成唯識論』の所説を指すとした上で、三島はこの呼称の別に無自覚のまま双方を使用していることを指摘している。だが本論は基本的に『豊饒の海』本文に立脚した考察をおこなうのが主眼なので、大部分で使用されている「唯識論」という呼称を用いる。本論における『豊饒の海』と唯識説の関連の理解については、井上の論考に拠るところが大きい。

(八) 多川俊映『はじめての唯識』（春秋社 二〇〇一年十月）第四章 本書は唯識説を平易な言葉で語った入門書で、論者（徳永）の唯識説の基本的な理解は本書に拠るところが大きい。

(九) 映画『トゥルー・マンショー』（"THE TRUMAN SHOW" 一九九八年 ピーター・ウイアー監督）は、巨大ロケセットである人工島の中でディレクターの指示で動く人々（俳優）と過ごす主人公トゥルー・マンの日常生活をテレビで実況中継するという荒唐無稽な物語だが、「虚構の人生」に気づいたトゥルー・マンが島を脱出すべく船出し、止めようとするディレクターが人工の嵐と雷を起こす場面がある。結局トゥルー・マンは島を脱出するが、このクライマックスシーンで、三島由紀夫の生涯を描いた映画『ミッシェル』（"Mishima: A Life In Four Chapters" 一九八五年 ポール・シュレイダー監督 緒形拳主演 日本未公開）のオープニングテーマ（フィリップ・グラス作曲）が使用されている。透の人生を思い通りに統御しようとする本多と上記ディレクターの相似や、人工島の名前が「シー・

ヘブン」(Sea Heaven) という「豊饒の海」と通ずる名であることなどから、同作が『豊饒の海』にインスパイアされていることを思わせる。

(十) 前掲井上隆史『豊饒の海』における世界解釈の問題 同論で井上は、三島の評論『小説とは何か』などの記述をふまえ、三島が『豊饒の海』に関しては例外的に結末を定めないで書き始めたことに言及している。

(十一) 柴田勝二『三島由紀夫 魅せられる精神』（おうふう 二〇〇一年十一月）所収「途絶する流れ——『暁の寺』と唯識論」（初出：『暁の寺』と唯識論——『豊饒の海』への視角）↓「日本近代文学」第60集 一九九九年）柴田著には、その他『豊饒の海』関連論文等にも示唆を受けた。

(十二) 多川は前掲書第七章で、現代の文脈に合わせ、《表層心をバックアップする過去への無限な広がりをもつ阿頼耶識》と述べている。

(十三) 柏倉浩造『かくも永き片恋の物語 三島由紀夫のフラクタル宇宙 『豊饒の海』解説』（未知谷 二〇〇〇年）は、『豊饒の海』のメインプロットを本多の聡子への片恋と捉えた興味深い論考である。

※ 三島作品の引用は、新潮社『決定版 三島由紀夫全集』（平成版）に拠った。ルビ、くり返し記号などは適宜省略改変した。

※※ 引用部分の省略、傍点等の指示はゴシック体で示した。

※※※ 和暦については必要と思われる場合のみ使用した。